



社会 教育

## 地域と学校が連携・協働するために

～コーディネーター等研修会 明善中学校の実践から～

2月18日(木) コーディネーター等研修会を、松本市立明善中学校を会場に、開催しました。明善中学校の教頭河西哲也さんと教諭清水恒作さんからは、『地域のためにできることを考えるボランティア活動』への変革(「お手伝い的なボランティア」からの脱却)を目指して取り組み、1年目となる「明善コミュニティスクールプロジェクト」について実践発表していただきました。既に生徒にある「ボランティア活動への意欲」と、地域がもっている「地域の未来につながるボランティア活動」への期待感、必要感を活かしながら、「地域が推進すること」のよさが活きるように地域の行事と総合的な学習の時間を融合(注1)し、「地域を愛し、地域と共に生きる子ども」を育ててきた明善中学校の説明を聞き、実際に地域の方と生徒がかかわり合っている支部生徒会の様子を参観した参会者からは、次のような感想が寄せられました。



(注1：文科省からの「総合的な学習の時間の4分の1程度で教職員の動向なしで休日に校外学習ができる」という通達を活用)

### 参会者のアンケートから

- ・コミュニティスクールには、「こうあるべき」の答えはありません。その学校、その地域に応じたやり方があると思う。その一つである明善中学校の取組は、素晴らしい、すごい取り組みだと思った。地域連携により、子どもは育ち、学校の閉鎖性はなくなる。前向きに地域連携を推進していきたい。
- ・生徒が主体となって振り返り等をした支部生徒会とてもよかった。(生徒の主体性の高まりへの可能性)
- ・松本市内新しい取り組みなので、各学校にも発信、共有したい。
- ・生徒の自主性を尊重し、地域も生徒の力を期待し頼る動きになっていることに好感もてた。
- ・地域によって差はありましたが、地域の方が会を進め、地域主導で動いている点は、今後の参考になった。
- ・地域と学校(生徒)がお互いに有益感を得られる先駆的な取組であると感じた。
- ・子どもたちが、地域の課題に直に関わることで、明善中学校の教育目標でもある子どもたち自身の考える力の創造力が培われることを、改めて認識した。また、大人のトップダウンでない仕掛けは、当村の活動においても参考になった。
- ・学校主体からの脱却がとても参考になった。協働によるCSのため、地域としっかり話をしていきたい。

信州型CSスペシャルアドバイザー八島思保さん(丘中学校で学校運営協議会・地域教育協議会の両会長)からは、明善中学校の実践のさらなる可能性に触れながら、次のように助言していただきました。

## 八島さんのご助言から

- ・目指す姿の「地域愛」とは結果論であるということ。地域愛はすぐには結び付かない。地域の人とふれあい対話から相手へのイメージや情緒に気づく。相手と自分の違いから存在意義を知っていくことで、自己基盤（自分の土台となるもの）が整っていく。だからCSは大事であり、協働する、対話することをどんどんさせたい。光り輝く場所を探すのではなく、今いる場所を自分自身を輝かすことが、地域愛へとつながっていく。輝かす場の提供が地域であり、行事はきっかけにすぎない。成長とは未来に花が開くもの。本当に地域を愛しているかどうか、10年20年後が楽しみだと思ってほしい。
- ・「今あるシステムを最大限に無理しない」ことも大切だが、社会を生き抜く力の育成には、新しいものを生み出すことを忘れてはいけない。体験の固定化は、新しい現象に柔軟になれなくなる。多様な体験を日常的に積み重ねることが、生きる力として根付いていくため、あらゆる体験をさせていく視点が大切である。
- ・今日の当たり前が明日には古くなるかもしれない社会であり、現在は不確実性の高い時代。正解のない問いに満ちた世界を子どもは生きていく。また、環境が変われば必要とされるスキルや知識も変化していくため、既存のみを見ていくのではなく、新しいものを考えることで大人も探求していくことを、これからのプロジェクトには盛り込みが必要。
- ・CSの活動は生徒ファースト。地域の活動自体にこだわり、活動を目的化するのではなく、子どもにどんな力をつけたいか地域と学校が共有し、地域が「君たちの力が必要だ」と質の高いメッセージを伝えていく。任せるという事は承認することになり、子どもが自分自身の存在を再確認することにつながる。
- ・学校を核とした学びの場ができています。さらには、「地域の問題」は短絡的な視点で共有するのではなく、全体を見せていくことが重要。全体から、子どもたちが考える問題の気づきを引き出すことで自主性につながる。「地域の問題＝リアリティ」・「現実社会での人との対話」には選択肢が無限にあり成長への刺激が高い。
- ・「地域に丸ごと投げていると思われないように」と話していたが、丸投げしていいと思う。協働するということはそういうこと。地域と学校は、お願いする、お願いされる関係でなく、一緒にやっていくということ。
- ・ものすごくいい取組だったと思う。まだ始まったばかりであり、導入過程は大変であると思う。私の所属場所も熟議を何回も重ね喧嘩もした。結果、現在は学校の間口が広がり風通しが良い。
- ・子どもたちを主語にして、子どもたちと共にある地域、子どもたちと共にある学校が、予測困難な社会を乗り越える新たな学校の活動になるのではないかと。



明善中学校の実践、八島さんのご助言から、改めてCS活動は学校だけ、地域だけではできないことだと学ぶことができました。明善中学校のように、「地域とともにある学校づくりは、学校を核とした地域づくりになる」ととらえ、生徒の主体性の高まり、地域の必要感から地域、学校の双方向の関係を構築していくことで、地



域と学校の連携・協働は加速し、CS活動は充実していくと学びました。そして八島さんのご助言では、地域と学校が連携・協働する必要性（予測困難な社会を生きる子どもを育むために、固定化しない多様な経験、多様な人との関りが必要）や、「協働」とはどのような地域と学校の間を言うのかを学ばせていただきました。明善中学校の実践、八島さんの助言を参考に、各地域、学校でも地域、学校が連携・協働してCS活動を推進してほしいと願っています。